谷内正太郎編著「【論集】日本の外交と総合的安全保障」ウェッジ、2011 年 10 月 28 日刊を読む

国家と国益

１．人が、国家という集団を作るのは、個として、また同時に、国家という集団として生存をはかるためである。その根底には、種としての生存を保持せねばならないという、さらに大きな力が働いている。それは、しばしば、狭隘な人智を超えたところで働いている。それを、孟子の言うように、「民意を通じて現れる天意」と呼んでも良いし、欧州の啓蒙思想家のように、「国民の一般意思」と呼んでもよい。

２．人は、生き延びるために、集団を作る。人は、統率者を選び、能力のある者がこれに追随し、権力が生まれる。集団の構成員は、統率者に生存の確保を期待し、自発的に服従する。弱者が庇護される。集団も、権力も、目的ではない。生存を確保する手段である。現在、最大の権力集団は、国家である。

３．現代の国際社会は、地球的規模で活躍する企業や NGO が大きな力を持ってきているとはいえ、依然として主権国家が主役である。地球全体を包摂するような権力集団は、未だ生まれていない。現代に生きる私たちは、個として、また同時に、日本という国として、生存を図っている。

４．国家の目的は何か。既に述べたように、国家は、それ自体が目的ではない。個々の人間の生存を確保するために、人間は群れを成して生き延びようとする。そのために、人は、国家を作っているのである。それでは、個々人の、或いは、集団の生存を確保するために、国家は何をすればよいのか。それが国家の目的を決めると言うことである。国家の目的は、国家の構成員が決める。では、一体、どのようにして決めればよいのだろうか。

５．第一に、国家の目的は、戦略的思考によって決められる。外界を客観的に認識し、生存を脅かす脅威を回避し、克服するために、同時に、生存を確保するための条件を改善するために、適切な手段を考える。これを戦略的思考という。

６．戦略的思考とは、生存を確保するための合目的的思考のことである。日本語や中国語では、ストラテジー(strategy)を「戦略」と訳すが、「戦」という漢字が入ってくるので、戦略的思考とは軍事的思考のことだと勘違いしやすい。戦略的思考とは、生存という国家最高の目的を実現するために、外交と軍事に於いて、どのような手段を組み合わせればよいかということを考える合目的的な思考のことである。

７．第二に、国家の目的は、普遍的な道徳感情によって決められる。群れとして生き延びるために、人には、良心という機能が与えられている。良心は、他者への優しさを生み、思いやりを生む。儒学では、仁と忠恕を教える。孟子は、惻隠の情を説く。キリスト教は愛を説き、仏教は知恵と慈悲を説き、ガンジーは人類愛を説く。皆、良心を素手で掬い取ることを教えているのである。

８．生存を確保し、その条件を改善するための営為を通じて、人の心から、優しさがあふれ、幸福感があふれる。幸福とは、生きる悦びを確認する感情のことである。逆に、群れとしての生存を悪化させる営為からは、苦しみが噴き出し、罪の意識と改悛の情が噴き出す。それが道徳感情である。

道徳感情は、先天的に与えられている。ここから倫理が生まれ、善悪の判断が生まれる。

9．善悪の判断は、良心という機能が教えてくれる。良心とは、群れの生存のために与えられた先天的な機能である。良心は、幸福を求める。だから、人は、幸福を求める。したがって、人は、必ず、倫理的完成を求め続ける。良心が、磨かれていく。その過程で、良心から生まれる善悪の判断が、幾多の経験によって信条へと変わる。それが体系化されて価値観が登場する。

10. 出来上がった倫理、道徳、制度、法は、民族による、国家による、差異がある。個別的である。しかし、その根底にある良心は機能であり、人類に普遍的なものである。だから人は、国家を超え、民族を超えて、理解し合い、共生することが可能なのである。現在、国際社会において、主流となっている考え方は、欧州の啓蒙思想から生まれ出た基本的人権と民主主義である。

11. 第三に、国家の目的は、国家構成員の話し合いによって決められる。話し合いを通じて、先に述べた戦略的思考や道徳感情を理解し合い、分かち合うことによって、「国民の一般的意思」が構成される。「天意」が、民の声として現れる。平時に於いて、国民の一般意思を確認するのが議会であり、それを執行するのが行政府である。だから、議会が最高機関と言われ、行政府が執行府と言われるのである。

12. 話し合いは、人が群れで生きていくために必須の営為である。人智は狭隘である。人間の社会は、人智によってのみ動かされているのではない。人間社会における活動の全てが知的に統括され得ると考えるのは、権力者が陥りやすい傲慢である。社会変動の幅は、人の知的限界を易々と破る。実際、社会の変動は、常に、人を驚かし続けている。驚いた人は、戦略的思考や良心を活性化させる。より根源的な生存本能が、それを命じるのである。そこから言葉が生まれてくる。借り物の言葉は、外から入ってくるが、本物の言葉は、いつも心の奥底にある良心から噴き出してくる。本物の言葉が、新しい社会を作り、古い社会を変えていく。

13. 特に、外界の状況が大きく変わり、集団の生存が脅かされるとき、一気に古い言葉が意味を失うことがある。倫理・道徳や法や制度までもが、急速に意味を失うことがある。「乱の時代」である。そのとき、多くの人々の心の底から、新しい言葉が噴き出してくる。人智を突き動かす生存の衝動から、言葉が生まれる。特に、大切なのは、良心が生み出す言葉である。良心が生み出す新しい言葉が、国民の一般意思のレベルにまで高められる時、新しい倫理を生み、新しい法を生む。そうして、社会変動に伴う暴力が回避され、経験に従って穏やかに社会が変わる。話し合いは、そのために重要なのである。

14. 民主主義国家では、国家の目的を、国民の話し合いで決める。それが、国益を定義すると言うことである。

P18 ～ 22

［コメント］

日本という国に生きながら国家とは何かを考えたことがない、国家について考えるのは国と国とが紛争や戦争の状況になった時だけだというのでは、ドロで縄を綯うようであまりにも危うい。平時の時にこそ、人類の歴史、日本の歴史を学びながら、また、現実世界をしっかりと認識しながら、国家とは何か、国益とは何かを考えたい。本書にはそのための手がかりを提供してくれる議論が満載されている。

― 2014 年 1 月 29 日林　明夫記―